

庫文波岩

746—747

子 草 枕

(抄曙春)

子草枕本堺一附

卷 下

訂校鑑龜田池

店書波岩

(覆木製本)

昭和九年五月二十五日印
昭和九年五月三十日發行

枕草子 下卷 ★★
定價 四十錢

校訂者 池田 龜鑑

發行者 岩波 茂雄

東京市神田區一ツ橋通町三番地

岩波文庫
746—747



印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目

新井長治郎

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇〇一八七
九段 〇〇一八九
一〇二番 (小賣部專用)
振替口座東京二六二四〇番

株式會社秀英印刷

庫 文 波 岩

746—747

子 草 枕

(抄 曙 春)

子草枕本堺一附

卷 下

訂校鑑龜田池



店 書 波 岩

目次

卷十

枕	草	子	3
二〇四 うまやは……………七	二〇五 岡は……………七	二〇六 社は……………八	二〇七 降るものは……………一三
二〇八 日は……………一三	二〇九 月は……………一四	二一〇 星は……………一四	二一一 雲は……………一四
二一二 騒がしきもの……………一五	二一三 ないがしろなる物……………一六	二二四 詞なめげなる物……………一六	二二五 さかしき物……………一七
二二六 上達部は……………一八	二二七 君達は……………二〇	二二八 法師は……………二二	二二九 女は……………二三
二三〇 宮仕へ所は……………二三	二三一 身をかへたらん人などは……………二三	二二二 雪たかう降て……………二四	二二三 細殿の遣戸……………二五
二二四 ただ過ぎに過ぐる物……………二六	二二五 ことに人に知られぬもの……………二六		

二二六 五六月の夕かた……………二六

二二七 賀茂へ詣づる道に……………二六

二二八 鶯に郭公は劣れる……………二七

二二九 八月晦日がたに……………二六

二三〇 いみじく穢き物……………二六

二三一 せめて恐しき物……………二九

二三二 頼もしきもの……………二九

二三三 いみじうしたて……………二九

二三四 世の中に猶いと心憂き物は……………三二

二三五 男こそ猶いと有難く……………三三

二三六 萬の事よりも……………三三

二三七 人の上いふを……………三四

二三八 人の顔にとりわきて……………三六

二三九 嬉しき物……………三六

二四〇 御前に人々數多……………三九

二四一 關白殿二月十日のほどに……………四三

卷十一

二四二 御經のことに……………五

二四三 尊き物……………六九

二四四 歌は……………六九

二四五 指貫は……………七〇

二四六 狩衣は……………七〇

二四七 單衣は……………七一

二四八 惡き物は……………七一

二四九 下襲は……………七三

二五〇 扇の骨は……………七四

二五一 檜扇は……………七四

二五二 神は……………七五

二五三 崎は……………七七

枕

草

子

二五四	屋は……………	七
二五五	時奏するいみじうをかし……………	七
二五六	日のうら／＼と……………	七
二五七	成信中將は……………	七
二五八	常に文おこする人の……………	八
二五九	きら／＼しき物……………	八
二六〇	方違などして……………	九
二六一	雪いと高く降りたるを……………	九
二六二	陰陽師のもとなる童こそ……………	九
二六三	三月ばかり物忌しにとて……………	九
二六四	清水に籠りたる頃……………	九
二六五	十二月二十四日……………	九
二六六	宮仕する人々の……………	九

卷十二

二六七	家廣く清げにて……………	一〇
二六八	見習ひする物……………	一〇
二六九	うち解くまじきもの……………	一〇
二七〇	舟の路……………	一〇
二七一	右衛門の尉なる者の……………	一〇
二七二	又小野殿の母上こそは……………	一〇
二七三	又業平の母の宮の……………	一〇
二七四	をかしと思ひし歌などを……………	一〇
二七五	よろしき男を……………	一〇
二七六	大納言殿まゐり給ひて……………	一〇
二七七	僧都の君の御乳母……………	一一
二七八	男は女親なくなりて……………	一一
二七九	定澄僧都に桂なし……………	一一
二八〇	まことや下野に下る……………	一一
二八一	或る女房の……………	一一

二八二 びんなき所にて……………二六

二九七 物語をもせよ……………二七

二八三 唐衣は……………二七

二九八 或所に中の君とかや……………二七

二八四 裳は……………二七

二九九 女房の参りまかんでずるには……………二八

二八五 汗衫は……………二八

三〇〇 すきずきしくて……………二九

二八六 織物は……………二八

三〇一 清げなる若き人の……………三一

二八七 紋は……………二八

三〇二 前の木立高う……………三一

二八八 夏うすもの……………二九

三〇三 清げなる童の髪長き……………三五

二八九 貌よき君達の……………二九

三〇四 見苦しきもの……………三五

二九〇 病は……………三〇

三〇五 物ぐらうなりて……………三七

子

二九一 心づきなきもの……………三一

二九二 初瀬に詣でて……………三四

二九三 いひにくきもの……………三四

二九四 四位五位は冬……………三五

二九五 品こそ男も女も……………三五

二九六 たくみの物食ふこそ……………三六

草

枕

枕草子春曙抄 卷十

二〇四

一 未勘
二 信濃にや
三 是より筆すま
び也

うまやは。梨原。ひぐれの驛。望月の驛。野口の驛。山の驛。哀なる事を聞置たりしに、又哀なる事の有しかば、猶取り集めて哀也。

○うまや——今の馬繼宿々也。和名云驛ウマヤ。唐令云每三十里一驛。若地勢險阻及無水草處隨縁置之。延喜式凡諸國驛路邊植菓樹一令往來人得中休息。

○なしはら——梨原。和名云近江栗本郡梨原。

○のぐちの——野口。和名云丹波船井郡又周防玖珂郡。

○山のうまや——和名云伊勢員辨郡野摩ニヤ。同云越後古志郡夜麻。

二〇五

一 大和片岡
二 未考

岡は。船岡。片岡。鞍岡は笹の生ひたるがをかしき也。かたらひの岡。人見の岡。

○ふなをか——山城紫野邊葬所也。古は清淨の地也。三代實錄云董仲舒祭法螟螣賊害五穀之時於害食之州縣内清淨處解之攘之。故命陰陽寮於城北船岡。

一三輪にや
二しろしの杉と
いへば也
三還江佐野郡こ
とのまぢの神社
と、延喜式云々
四云ふ事のまゝ
に願を叶ふべき
やうなれば頼も
しと也
五和泉國和泉郡
延喜式
六是より此神の
物語也即貫之集
にあり
七老たる物也
八親の心也
九制也、法度の

修此祭蓋擇清淨之處。

○ともをかはさゝのおひ——和名山城乙訓郡鞆岡。梁塵秘抄神樂採物語「このさ
さはいづこのさゝぞとねりらがこしにさがれるともをかの笹。」

○人見のをか——佳吉物語に嵯峨野へ子日に出て「手もふれでけふはよそにて歸
なん人見の岡の松のつらさよ。」

二〇六

社は。布留の社。生田の社。立田の社。はなふちの社。みくりの社。すぎの御社。し
るしあらんとをかし。ことのまゝの明神いと頼もし「さのみ聞きけん」とやいはれ
給はんと思ふぞいとをかしき。蟻通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、此明神の
やませ給ふとて、歌よみて奉りけん、に、止め給ひけん、いとをかし。此蟻通と附け
たる心は、誠にやあらん。昔おはしましける帝の、只若き人をもおぼしめして、
四十に成ぬるをば失はせ給ひければ、人の國の遠きに行き隠れなどして、更に都の
うちにさる者なかりけるに、中將なりける人の、いみじき時の人にて、心なども賢
かりけるが、七そち近き親二人をもたりけるが、かう四十をだに制あるに、まして
いと恐ろしとおぢ騒ぐを、いみじう孝ある人にて、遠き所には更に住ませじ。一日
に一度見ではえあるまじとて、みそかに夜々家の内の土を堀りて、其内に屋を建て

心也
 三中将の事也
 二孝也
 三老親を置く也
 三かの親はこゝ
 になしといふ心
 也
 三草紙の地
 三イキこえあり
 三心操の發明な
 る事也
 一七是も此帝愚に
 て老人を捨給ふ
 心ある故に他國
 よりもちかがふ
 なるべし
 三イ心見事をし
 元此國人いづれ
 も若くて分別な
 かりし故也
 三中将の心也
 三孝父の詞也
 三教也
 三中将參内して
 也
 三川邊へ同道し
 て也
 三云それ
 三云正也
 三七親に問也

て、それに籠め据ゑて、行きつゝ見る。おはやけにも人にも、失せかくれたる由を知らせてあり。などてか家に入るたらん人をば、知らでもおはせかし。うたてありける世にこそ。親は上達部などにや有けん。中将など子にてもたりけんは。いと心賢く萬の事知りたりければ、此中将若けれど、ざえあり、いたり賢くして、時の人におぼす成けり。唐の帝此の國の帝を、如何で圖りて、此國うち取らんとて、常に試み、あらがひ事をしておくり給ひけるに、つや／＼とまろに美しげに削りたる木の二尺ばかりあるを、是が本末いづかたぞ」と問ひ奉たるに、すべて知るべきやうなければ、帝おぼしめしわづらひたるに、いとほしくて、親の許に行きて、「かうの事なんある」といへば、「只速からん川に立ちながら横様に投げ入見んに、かへりて流む方を末と記して遣はせ」と教ふ。参りて我知り顔にして、「試み侍らん」とて、人々具して、投げ入れたるに、先にして行かたに印を附けて遣したれば、まことにさなりけり。又二尺ばかりなる蛇の同じやうなるを、是はいづれか男女」とて奉れり。又更に人得知らず。例の中將行きて問へば、「二つを並べて、尾のかたに、細きすばえを差し寄せんに、尾働かさんを女と知れ」といひければ、やがてそれを内裏の内にてさしければ、まことに一つは動かさず、一つは動かしかるに、又印附けて遣しけり。程久しうて、七曲に蟠りたる玉の中とほりて、左右に口開きたるが、小きを奉りて、「これに緒通して給はらん。此國に皆し侍る事なり」とて

元親の教る詞也
元木の枝也
三尾動也
三女と知れと也
三さやうにする也
三雄雄をしるし
たる也
鼠穴の曲り通り
也
三緒也
三被國俗此玉に
緒を貫と也
三中將老父に問
也
三老父の詞也
三難也
三イみち
三中將其由を帝
へ申也
三心み事をせぬ
也
三帝の御心也
三イ何わさ
三中將詞也
三官也
三穴かの老父をい
ふ也
三イは

率りたるに、いみじからん物の上手不用ならん。そこらの上達部より始めて、ありとある人「知らず」と言ふに、又行きて「かくなん」といへば「大きな蟻を二つ捕へて、腰に細き糸を付け、又それに今少し太きを付けて、あなたの口に蜜を塗りて見よ」といひければ、さ申て、蟻を入れたりけるに、蜜の香を嗅ぎて、まことにいととう穴のあなたの口に出にけり。さて、其糸の貫かれたるを遣したりける後になん、猶日本は賢かりけりとて、後々はさる事もせざりけり。此中將をいみじき人におぼしめして、「何事をし、いかなる位をか賜はるべき」と仰せられければ、「さらにつかさ位をも賜はらじ。只老たる父母の隠れ失せて侍るを尋ねて、都に住まする事を許させ給へ」と申ければ、いみじう易き事とて許されにければ、萬の人の親是を聞て喜ぶ事いみじかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなんありける。さて其人の神に成りたるにやあらん。此明神の許へ詣でたりける人に夜現れて宣ひける。七曲に曲れる玉の緒をぬきてありどほしとも知らずやあるらんと宣ひけると人の語りし。

○ふるのやしろ——延喜式大和國山邊郡石上坐布留御魂神社。日本紀神代卷そのをのみこと、八岐の大蛇をきり給へる劍を、蛇の龜正と名づく。是今石上にいます由見ゆ。神皇正統記神武天皇豊布津といふ劍を宇麻志間見命に賜へり。其劍を石上にあがむる由みゆ。袖中抄昔女河邊にて布を洗ひしに、河上より劍流き

て、萬の物を皆きり破りしが、此布にまつはれ止まりしを、此社に祝故に、布留とはぬのにとどまるとはかけり云々。三代實錄、清和天皇貞觀九年三月十日大和國石上神加^ニ正一位^一云々。

○いくたの社——津の國八部郡と延喜式にあり。日本紀神功皇后の時、天照大神のいもうと稚日女尊^{ワカヒメノミコ}われ活田長峽^{イダナガサ}の國に居んと教給ふにより、海上五十狹茅^{ウミノサカサ}をもちて祭らしむ。

○たつたの——延喜式大和國平群郡立田坐^{ヘトリノコホリニマス}天御柱國御柱二座云々。日本紀天武天皇四年四月、美濃國佐伯廣庭^{サエキヒロ}に、風神を龍田の立野にまつらしむ。

○はなふちの社——陸奥宮城郡鼻節^{ハナフチノ}神社延喜式にあり。シとチと通ず。

○みくりの——美久理神社越後沼垂郡延喜式。

○ことのま——文德實錄二日嘉祥三年七月遠江國任事社授^{コトノマニ}從五位下^ニ。

○さのみききけんとや——古今誹諧歌「ねぎ事をさのみききけん社こそ果は歎きの森となりなめ。」宗祇云ねぎ事は神にいのる心をいふ也。それを戀にとりて、あだなる人のこなたかなたよりあはまほしき心をいふをきくにそへたり。あまり心よはきは後の歎きとなる義也。事任^{コトノマ}といふ名に付て、此歌を引ていへる戲也。

○などてか、家に入ゐたらんを——老人の出つかへんをこそ嫌ひ給はめ、家内に居たらんは知らでもおはせよかし、などてかさまでは制し給ふらんとの心也。愚

かなるおきてを怪しむ詞也。

○時の人とおぼす成けり——帝の御心にも、此中將を當時の賢良とおぼせし也。
 ・老父の後見ありし故なるべし。

○いとほしくて——此詞淺きに似て意味あり。帝かく愚におはして、老人を捨給ふ故、天下の人うとみまゐらせて、此他國のうかがふ難をも救はんと思ふ人なけれど、中將はさすがにいとほしく思ひまゐらすると也。

○さきにして行かたにしるしをつけて——老父の教へし如く、木の先にして流るる方を末とするしてなり。

○七わだに——七曲也。ナ、リク

○いみじからん物の上手ふようならん——至たる物の上手も、此玉には緒をえ通さじと也。ふようは不用也。

○又それに今すこしふときをつけて——蟻の腰には細きをつけて、又玉を貫くべき緒に今少し太きをせんとて、申しつぎといふ物にせし也。

○みつをぬりて——蜜の香につきて、蟻のよく行くべきが爲なるべし。イみちとあり。同じ事也。源氏鈴蟲に、みちをかくしほろろげてとあり。是も蜜也。

○日本——ひのもとと讀むべし。又日本紀をやまとぶみと讀めば、やまととも讀むべきにや。

○只老たる父母の——是中將、我父母の事を言ふに非ず。すべて世人の父母を許されん事を言へるなるべし。其中に我父母の事はこもれば也。目蓮尊者、我母の地獄にあるを救はんとするに、あまねく一切の衆生の孟蘭盆を行はしめて、其母をもうかましめ給へりし佛の方便と同じかるべし。

○なゝわだに——七曲也。歌の心明也。袋双紙にも、此歌蟻通明神の御歌と記して、是昔彼社の邊に旅客の宿れる夢に示し給ふ歌云々。これも枕双紙に付て云へるにや。

二〇七

一 イまじりてふ
二 檜皮也
三 丸瓦の間々を
いふ也
四 イ本庭の字なし

降るものは。雪。霰。霰は憎けれど、雪の眞白にて混りたるをかし。雪はひはだ葺いとめでたし。少し消えがたになりたる程。又いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入て、黒う眞白に見えたるいとをかし。時雨、霰は板屋。霜も板屋、庭。
○雪はひはだぶき——檜皮葺に降りたるがおもしろしと也。次に霰は板屋といふも同。

二〇八

日は。入日。入り果てぬる山際に光りの猶とまりて、あかう見ゆるに、薄黄ばみた

ニイわたりたる

る雲のたなびきたる、いとあはれなり。

○うすきばみ——薄黄也。堀河百首「口なしの色にたなびく薄雲を雪けの空と誰か見ざらん。」

二〇九

月は。有明。東の山の端に細うて出る程衰也。

二一〇

星は。すばる。彗星。明星。夕づつ。よばひ星をだになからましかば、まして。

○すばる——昂星、和名六星の火神云々。

○みやうじやう——明星、和名に阿加保之とよめり。神樂歌吉々利々にあかほしやみやうじやう云々。

○夕づつ——長庚、和名太白星の一名也。暮に西にあらはるる星也。

○よばひぼし——流星、和名天津星にしもかゝる名をさへつかずばとたはむれし詞也。

草
一牽牛
ニイすこしをか
し
三例の書さした
り

枕

イくろきもを
かし
二天雲也
三イたなり

雲は。白き。紫。黒き雲哀也。風吹折のあま雲。明はなるる程の黒き雲の、やう
やう白うなりゆくもいとをかし。「朝に去る色」とかや文にも作りけり。月のいと明
き面に薄き雲いと哀也。

○朝に去色——古詩の詞なるべし。未考。

三二

一外より也

騒がしきもの。はしり火。板屋の上にて鳥の齋のさば食ふ。十八日清水に籠合たる。
暗う成てまだ火もともさぬ程に、ほか／＼より人の來集りたる。まして遠き所、人
の國などより家の主の上りたる、いと騒がし。近き程に火出來ぬといふ。されど燃
えはつかざりける。物見果てて車の歸り騒ぐ程。

○はしり火——置く炭など飛火するを云ふにや。むねはしり火など歌によめり。

○ときのさばくふ——未勘、但齋の産飯を屋根にうちあげしを争ひ食ふをいふに
や。

○十八日清水に——世に十八日を觀音の日とする事。勝尾寺の觀音を、妙觀と云
ふ人、寶龜十一年七月十八日より、僧俗童など十八人して、千手の像四天皇等卅
日に刻み終りて、八月十八日に妙觀うせたり。彼十八人も見えずなりし。これよ
り國俗十八日を觀音の日とする也。

元享
釋書